

象牙、ついに日本上陸!

速報

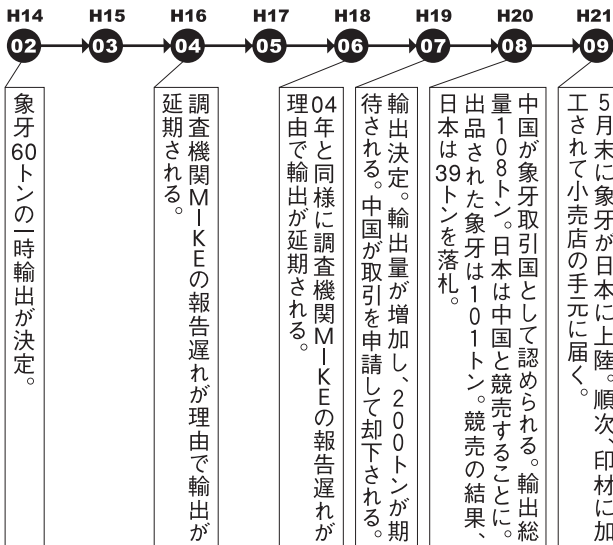
タンザニア、ザンビア、モザンビーク……

調査で判明、アフリカにはまだ象牙がある?!



念願の象牙がついに日本に上陸。1~2ヶ月後には小売店の手元にも印材として届く。一方、小売店や問屋では、象牙輸入を記念したキャンペーンを行うところも出てきた。(写真は「ワールド流通センター」で、先行して開梱された南アフリカの象牙の検品作業風景。撮影・高市雅也氏)

【象牙取引を巡る一連の流れ】



下) 脚タカイチに届いた南アフリカの象牙。大ぶりの牙が多い。こうして大量の象牙が並ぶと壮観だ。
 右) 届いた象牙の重さを量り、現地の計量と誤差がないか確認。
 右下) こんな大きなコンテナが合計6つも届いた。サイズが大きいので、10トン車に載せたようだ。



念願の象牙39トンが、ついに日本に上陸した。
 5月25日には東京都江東区にある「ワールド流通センター」で種の保存法に基づく原材料器官等の登録に向けた準備作業が行われ、マスコミ向けの撮影時間も設けられた。この後、象牙はいくつかの審査を経て各象牙メーカーの元へと運ばれた。
 この報せに、胸を撫で下ろした小売店も多いだろうが、一番「ホッ」としているのは象牙メーカーだろう。02年に一時取引が認められてから7年もの歳月をかけた象牙がやっと手元に届いたのだ。しかもこの象牙、日本に上陸してから象牙メーカーに届くまでにも一悶着があった。輸入されたナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカの象牙のうち、南アフリカ以外の3ヶ国が書類の不備や紛失のため、運送会社の倉庫から動かせないという状況に陥っていたからだ。
 そのため、先行して南アフリカのみだけが開梱され、各象牙メーカーへと届けられた。その後、ボツワナの書類は南アフリカの税関当局で発見、ジンバブエの書類は再発行された。こうしてやっと書類が揃った3ヶ国

分の象牙が、5月25日に開梱されるという運びになった。

入札額は1キロ
 200〜300ドル

今回入ってきた象牙は、昨年10月28日から11月6日にかけて、アフリカ4ヶ国で行われた入札で競り落とされたもの。ナミビア(10月28日)を皮切りに、ボツワナ(10月31日)、ジンバブエ(11月3日)、南アフリカ(11月6日)の順で開催された入札に、象牙印材メーカーなどが所属する日本象牙美術工芸組合連合会(会長・櫻井実氏)のメンバー20社23名が参加。中国と一騎打ちの競売で、象牙39ト

ンを落札した。日本側の買い付け総額は、約10億円。

出品された象牙の総量は101トン（入札前の発表では102トン）。入札の前日に、参加した象牙組合のメンバーがあらかじめ象牙を検品。ナミビア、ジンバブエ、南アフリカの3ヶ国の象牙検品では、日本と中国が午前、午後後時間を割り振って検品作業を行った。翌日は会場で競売を行う。象牙の質は、大、中、小が入り交じり、印材に最適な中サイズがなかった国もあつたという。

入札に際し、中国の入札額が高額になるのではと懸念されていたが、蓋を開けてみると、入

札額はキロ当たり平均2000、300ドル（約2、3万円）に落ち着いた。最終的に日本に届くまで、落札金以外に国ごとの税金、運賃、消費税など輸入経費が約3割程度かかってくる。

ちなみに、中国側は日本の象牙メーカーとの雑談の中で、「日本は既に99年に49トンの象牙を買い付けている。我々はその時入札に参加できなかったので、今回は49トン+102トンの半分、75トンを買う権利がある」と主張していたそうだ。

最終的に、量としては中国側が相当量を落札したように見えるが、これは中国と日本では求める象牙の質が違うから。

中国は美術品用途のため、多少のヒビ入りや折れた小さな牙でも買う価値がある。美術品は、小さなパーツを組み合わせて作ることが多いからだ。対して、日本は印材用途が多いので、自身のしつかりと詰まった象牙が必要。厳選した結果、39トンに絞り込まれたというワケだ。

参加した象牙組合員によると、「大きな牙、小さな牙、折れた牙などは中国が買って、印材に適した中サイズの牙を日本が買う、という流れ。競り合って価格が急騰することもなかった」と言う。

南アの象牙は大ぶり
他は小物も多し

実際に輸入された象牙を、大阪の象牙メーカー、㈱タカイチ（大阪市天王寺区）に見せてもらった。

先行して開梱された南アフリカの方で、タカイチに届いたのは5月16日。大きな木箱や段ボール箱など計6つに納められた象牙は大量で、足下に並べられた様子を見ると象牙が輸入された実感が湧いてくる。

南アフリカの象牙は比較的大

特報 象牙一時輸入! メーカー協賛
(今後9年間は輸入されません) (12ミリ丸) **各店5本限定**

象牙銀行印
¥10,000

ケース付
姓のみ又は
名前のみ彫刻

させば振興券ご持参の方に限り、期間限定で販売。
この機会に是非、下記加盟店でお買い求めください。(5月31日まで)

★人生の節目には必ず印鑑との出会いがあります
子供・孫の誕生祝・入学・卒業・就職・成人式・結婚・プレゼントetc.

 他にも
お買得品を
多数品揃え

社団法人 全日本印業協会 会員	会費
全国印業組合連合会 会員	会費
井手印堂 (高砂町)	☎24-8515
岸川印房 (松浦町)	☎22-2448
兵動一真堂印店 (本島町)	☎22-6509
都知木印業 (大宮町)	☎31-2518

佐世保組合がミニコミ誌に出した広告。定額給付金と象牙一時輸入のニュースが重なったことで、タイムリーなキャンペーンとなった。

④シマツの「象牙輸入再開記念キャンペーン」販売キットに含まれている販促用ポスター。組合で活用されるなど、人気を集めている。



④タカイチが用意している「象牙輸入記念キャンペーン」の20ランド紙幣ディスプレイ。20ランド紙幣が無くなるかもしれないので、レア度が高い。用意されているディスプレイは数に限りがある。



ぶりなものが多く、30kg合の牙も少なくなかった。同社の高市雅也社長によると、「今回輸入した中で、南アフリカの象牙が一番大きかった。他の3ヶ国からの象牙はこれよりも小さいものがほとんどだろつ」。

中には300グラムしかない牙もあり、それらは「運が良ければ芯持ちが取れるかどうか」だそう。

定額給付金狙った象牙キャンぺ好評

同社ではこの日、届いた象牙の重さを量り、アフリカで計測された重量と誤差がないかID番号を元にチェックして、倉庫にしまい込んだ。この象牙は、早ければ一ヶ月後に印材となつて印章店の手元に届く予定。

象牙一時輸入のニュースを受けて、小売店や問屋がキャンペーンを行う例もある。

長崎県にある佐世保市の印章小売組合では、岸川覚組合長（岸川印房）の発案で、定額給付金と絡めた象牙一時輸入の

キャンペーンを行っている。

佐世保市組合の印章店4店の合同企画で、内容は「象牙銀行印（12mm丸）がケース付きで1万円」というもの。彫刻は姓名は名前のみ。各店5本限定販売となっている。

定額給付金に併せて発行される1割プレミアム付きの「させば振興券」（発行・佐世保市商店街連合会）を持参したお客のみに販売し、キャンペーン期間は5月末まで。地元のミニコミ誌に広告を掲載したところ、わずか1ヶ月で限定販売数を超えそうな勢いだと言つ。

発案した岸川組合長は、「年頭から定額給付金の話題で盛り上がり、旅行会社などもこれに合わせたキャンペーンをしていて思いついた。ちょうど象牙も入ってきたし、タイミングもピッタリだった」。

印材問屋の榊シマツ（奈良市）では、春の商戦第3弾商品として「象牙輸入再開記念キャンペーン」販売キットを発売。

象牙一時輸入を記念した販促キットで、導入すれば簡単に「輸入再開キャンペーン」が展開できるというもの。キットの内容は、象牙15mmセット、象牙12mmセットとA3ポスターがバ

ツケージされている。各セットには、象牙印材（並）の他に、カメケース、桐箱、プライスカードが付属している。同社営業部の島津恒久氏によると、

「印材そのものは十数本ストックしている店が多いので動きは少ないが、ポスターが欲しいという声はよくいただいています」と言う。一時輸入に絡めて象牙を売りたい、という意欲のあらわれだろう。シマツの用意した象牙キャンベーンポスターは愛知県や姫路市の印章小売組合で活用されるそうだ。

象牙印材メーカーの榊タカイチでは、「象牙輸入記念キャンベーン」を実施している。

内容は、ソウの絵が印刷された、南アフリカの通貨「20ランド紙幣」と、店頭に飾れる専用

ディスプレイをセットにして購入店にプレゼントするというもの。20ランド紙幣は、象牙入札のためにアフリカに滞在していた同社の高市雅也社長が現地ですに入れた。

プレゼントの対象は、12×60mm以上、並以上の象牙印材（10本以上）の購入者。ちなみに、このランド紙幣は近々無くなるという話もあり、プレミアがつく可能性がある。

タンザニアは象牙を持っている？

小売店や問屋、メーカーはこうしたキャンベーンを積極的に展開しているが、今回の一時輸入で象牙の価格が下がったわけではない。なぜなら、あまりに

も量が少ないからだ。落札した39トンは、99年に一時輸入された50トンを下回る量。落札量を単純に象牙組合のメンバー20社で割ると、1社あたり約2トン。今後9年間、象牙取引がないとしたら、1年間に220キロ程度、月に18キロの象牙しか使えないことになる。まさに雀の涙と言ったところ。また、象牙保有国であるナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカの4ヶ国が今後9年間、象牙取引ができないという取り決めもダメージだ。決して象牙を取り巻く状況は楽観できないだろう。

しかし、明るいニュースもある。アフリカのタンザニア、ザンビア、モザンビークが象牙を保有していると、最近の調査でわかった。そのうち、タンザニアについては日本象牙美術工芸組合連合会の青年部が実際に現地に赴き、保有する象牙を目にしているの、期待も大きい。

今後、こうした保有国が一時輸出に手を挙げてくれれば、1年か2年のスパンで定期的に象牙が入ってくる可能性もある。今後も象牙問題については注目しておく必要があるだろう。

（終）